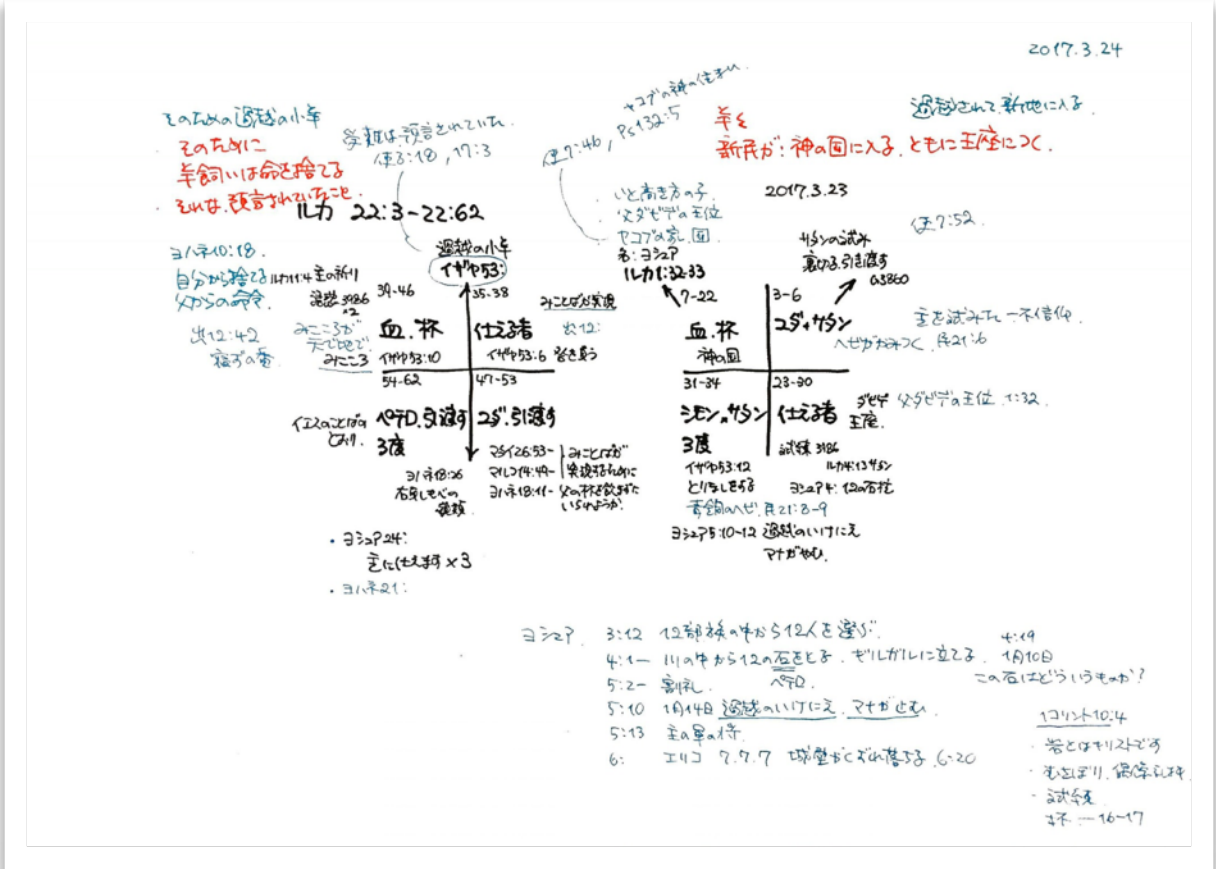
ルカ福音書22:3-22:62



ルカ福音書の18章の31節から最後までの大きな4番目の段落。サタンがかかとにかみつくけれども頭が踏み砕かれるという創世記3章の箇所です。「わたしはおまえ(サタン)と女との間に、また、おまえ(サタン)の子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼(メサイア)は、おまえ(サタン)の頭を踏み砕き、おまえ(サタン)は彼(メサイア)のかかとにかみつく。」という預言があります。この預言がいよいよ成就するというのが、このルカ18章31からの段落というように見ています。

十字架と復活の話(18:31~34)と都がさばかれる(19:41~48)ということでそれがあらわされる。こちら(18:31~34)がかかとにかみつく。(19:41~48)頭が踏み砕かれる。その大きな段落の中の今見ようとしているのが、22章3節から62節までと、22章63節から23章49節。ここがサタンが噛み付くというところですね。この2つの前半の22章3節から62節までの方ですね。引き渡されて(22:3~62)、十字架につけられる(22:63~23:49)。この裏切られる箇所。引き渡されると裏切られるのは同じなのですけど、引き渡される、サタンが噛み付くというところの最初の半分(22:3~62)のところを見ています。

その箇所自体はどのぐらいの長さかというとA4で２枚くらいです。この段落はイスカリオテと呼ばれるユダにサタンが入ったというところから入ります。園での話になりますけれど、過ぎ越しのいけにえとして捧げられるというところです。サタン(:3~6)、ここにもサタン(:31~34)が出てきます。ユダとサタン(:3~6)、シモンとサタン(:31~34)。

大きく2つに分かれているというように思われます。形が似ていますね。ユダ、サタン。シモン、サタン。それと(:31~34)3度と知らないと言います。こちら(:54~62)は3度知らないと言ったというここのストーリーが並行しています。それと(:3~6)ユダが引き渡す、こちらは(:47~53)ユダが実際に引き渡すというところです。それと血と杯。ここ(:7~22)で最後の晩餐を一緒に食べて、ご自分の血と杯について話します。ここの段落(:39~46)でも血と杯の話をします。残っていることここ(:23~30と:35~38)ですね。ここがどういう段落なのかということですけれど、こちら(:23~30)は一番偉い人は誰かという論争のところですね。誘惑の時にもついてきてくれた人たちが王座に着きますということ。(:35~38)いよいよ時が来ましたから今まで足りないものありませんでしたけども、これを持って出て行きなさいと。彼は罪人達の中に数えられたと書いてあることが成就するのですと言われているところです。この2つは仕える者、仕えるしもべであるということが共通点であろうということです。イザヤの53章の仕えるしもべの段落のところです。ここで「しかし彼を砕いて痛めることは主の御心であった」というところですね。最後のところで「彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする」というところがありますけれども、このしもべは、「多くの人の罪を負う罪人たちの中に数えられた」ということです。そしてとりなしの祈りをしてくれるところですね。ペテロのために信仰がなくならないように祈りました。背いた人のためにとりなしの祈りをしてくれるというところですので、このイザヤのところを見ても仕えるしもべであるということが、いよいよ明らかになりますよということだと思われます。ここ(:23~30)に「私のさまざまの試練の時にも」と書いてあるところと、(:39~46)「誘惑に陥らないように祈ってください」という、この「誘惑」と「試練」が同じなんですね。誘惑の時にもと、試練の時にも試練に陥らないようにと言っていることばが同じです。その誘惑に陥らないようにというのは、サタンが出てきます。ルカ4章で40日の荒野の中で悪魔が誘惑してくるというところですね。3度誘惑が来ますけれど、この4の13節「誘惑の手を尽くした後で悪魔はしばらくの間イエスから離れた」。この誘惑とこの試練の時にもと、ここの誘惑というところが共通しています。この誘惑に陥らないように祈って下さいと言っているこのサタンとの戦いということだというのは、それでもよく分かるかと思いますね。この仕えるしもべとして来られた。仕えるしもべである者が王座に着きますと言われているところなのですけれど、蛇が噛み付かれて傷つけられるということが、これから起こることなのですけれども、それが来ないとこの神の国も支配も来ませんということは、ずっと預言されていたのですよということが、ここの段落で強調されてるものだと思います。いよいよ引き渡される。裏切られる。でも、それは神の国が来る。神の国が来る、そして王座について支配する。そのために必要な出来事ですよということが、こちらの必要な出来事として書かれているものだという風に思われます。

蛇がかかとにかみつく話は具体的にいうと、民数記の21章に青銅の蛇の話があります。燃える蛇、誘惑にあった、もしくは主を試みた事件というのは、何度もモーセに逆らってあるのですけども、信頼しないという出来事があった時に、燃える蛇を送られたので、民に噛み付いて多くの者が死んだ。蛇を取り去ってくださるようにと祈って、青銅の蛇を作って旗ざおの上につけて、その青銅の蛇を仰ぎ見ると生きるというこの出来事と教えがあります。その青銅の蛇のことは、蛇が噛み付くというところですので、ここで思い出すべきところですね。

全体としては、これは過ぎ越しの祭りの時の話です。過ぎ越しの祭りの話といった時に、エジプトから出るときの過ぎ越し、それが最初の過ぎ越しですから、もちろん連想するのですけれど、ここはヨシュアが約束の地に入る時にもう一度行っている過ぎ越しの祭り。こちらの方を連想をした方が良いのじゃないかなと思います。もちろんエジプ

トから出るところもそうなのですけど、その背景に立った上でのヨシュア記の方の出エジプト、これがヨシュアという名前ですからね。イエス様のところを思い出すのかなとここに書いてあります。12部族の中から12人ずつ選ぶのですね。川を渡った後、それで石を取る。12個のペテロを取ってギルガルに記念の石を立てます。1月10日、過ぎ越しの日の4日、祭りの4日前にはこれらの石はどういうものなんですかと聞いたら、こう答えなさいというようなことが書かれています。割礼があって1月の14日にエジプトのそしりを取り除いたということで、過ぎ越しのいけにえをささげました。そうしたらマナが降るのが終わりました。それで主の軍の将が現れますという復活の主みたいなものですかね。過ぎ越しのいけにえがあって、マナが止んで、新しい約束の地に入る。新しい国が来る。そして新しい王たちの支配の時が来ると言われているこのヨシュア記のところを思い出すのが相応しいのだろうと。ヨシュア記の最後のところに、ヨシュアが民に「私と私の家とは主に仕える」というように言うと、「私たちも仕えます」と言って、3度私たちは仕えますというふうに言うところがあります。シモンペテロがイエス様を3度否定するというところを見ると、ヨシュアの3度というところを思い出すのかなと。それで復活した後に、それはルカには書いていないですね。ヨハネ福音書のほうでは3度私を愛しますかというように質問が変わっていますけれども、愛しますと答えるというところも、このヨシュアのところを連想するものですよね。その新しいヨシュアが来て民を救い出す。いよいよその国に入ると言われているところで、そのために引き渡されてかかとに噛みつかれるということは預言されていたことですよ。それは御心なのですよ。ルカ1章でイエス様が名前をイエス、ヨシュアと付けなさいと言われた時に「その子は優れた者となり、いと高き方の子とを呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」と言われている通りにダビデの王座を12の部族の長と共に、12使徒と共に治める。神の国が来るということでこの箇所が言われているところですね。

他には、エジプトから出るというところももちろん出エジプトですから思い出すところがありますけど、たとえば出エジプト記12章のところ。出エジプト12章の川を渡る時に、エジプトの人たちから銀飾り、金飾り、着物をもらってエジプトからはぎ取って出て行きなさいと言われてるところがありますよね。それで出て行くのですけど、主はエジプトから出るまで寝ずの番をされたというのがありますけど、ここでも誘惑に陥らないように寝ずの番をしてくださっている。これがここ(:39~46)の段落ですね。それとここ(:35~38)で財布のある者は財布を持って、袋を持って出ていきなさいと。杖を持っていくようなものなのかなと思いますね。エジプトから出るときに寝ずの番をしてくださったことも思い出すように書かれているように思いますね。

もう一つ、「神の国が来る時までに過ぎ越しが神の国において成就するまでは」の言い方が「二度としません」というのはどういうことだろうという感じなんですけども、使徒行伝の10章41節、ペテロが話しているところですが「しかしそれはすべての人々にではなく何々。私たちはイエスが死者の中からよみがえられて後ご一緒に食べたり飲んだりしました。」ということがここに書かれています。「食べたり飲んだりしました」と書かれていますから、飲んでいます。復活した後40日の間に飲んでいます。ですから、復活したら神の国が来た。過ぎ越しのいけにえとして捧げられて復活したと言った後に食べているということは、もう神の国が来ましたということが、そのことでもすぐに来ますよと。これから来る時までずっと待ってねと言うよりは、いよいよその時ですよということが、この言い方でわかるのかなというふうに思います。